

# 「いろいろもち」に近づぐために

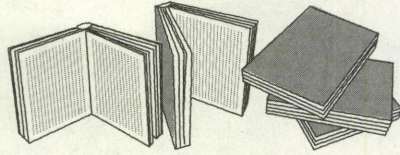
浜口順子

特集「いま、倉橋と出会う」の第一回目は、倉橋の保育理論の中でもひととき美しい彩りを放つ和語「心もち」を取り上げる。右の「「こころもち」と題する文章は、昭和十一年に出版された『育ての心』の前半、「子どもたちの中にいて」という章に収められている。『育ての心』には合わせて五十篇、詩のような、それぞれ十行程度の短文が続く。私は、よくその辺りのページをぱっとあてずっぽうで開いてみて、読んでみる。新鮮な風に吹かれたような気分になる。

## 全体性

最初にこの文章が発表されたのは、昭和七年の『幼児の教育』（第三十二巻）五月号の巻頭言だった。その前年に出版された、倉橋の代表的な学術的著書『就学前の教



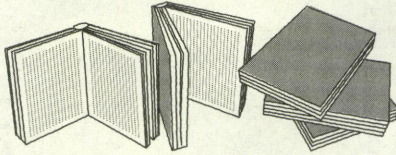


育』において、「就学前の教育法の特性」として掲げられた八つの項目のうち、最後のものが「心もち」である。「生活本位」、「遊戯の尊重」、「社会的」、「環境的」、「機会の捕捉」、「欲求の充足」、「生活による誘発」という七つの漢語的項目の後に、「心もち」が最後にくる。来てしまふ。この違和感は何か。これは、ただ言葉の雰囲気のみで、漢語的・学術的な七項目で、幼児期の生活的な教育のあり方全体はほぼ分析できているのだが、それだけでは言い足りない何かなのである。「全体としては心もちが潤っており、心もちが滲んでいなければならぬ」と倉橋は説く<sup>註</sup>。

「心もちは味である。就学前教育はその意味において味の教育である。心もちは感じである」心もちは、認識の対象ではなく、感ずるものなのだ。だが、いま、子どもが「悲しんでいるな」「楽しそうだな」などと感じるだけでもなさそうである。情緒を喜怒哀楽に分けて、そのどれかの言葉で済ませてしまつては、まだ認識に近いのではないか。味も、甘いか辛い酸っぱいか、いずれかの言葉を選んだだけでは、感じたものを言い表したことになる<sup>註</sup>。

本田和子は、倉橋の嗅覚という感覚にも着目する<sup>註</sup>。倉橋は、本当の子どもの匂いがしない幼稚園を「臭い」と言つては警鐘を鳴らすのである。子どもの生活者としての匂いは遠ざけたい臭気ではないが、「幼稚園」が生活から離れ固定化した方法に流れる時、それは臭くなる。物理的な嗅覚ではない、深く見通す感覚である。この種の感覚をもつてして「心もち」にも近づけるのであろう。





### 「気持ち」と「心もち」

「心もち」という言葉は「気持ち」と似ているが、語感に相当異なる。倉橋の時代もそうだったのだろうか。ほんの一例だが、ちょうど「こころもち」が書かれたのと同年の、これら二つの言葉が混在する文章を見つけた。倉橋は、人形芝居を幼稚園に広めたいという思いを述懐し、「その時の私の心持ちの中には、型にはまった幼稚園を、真に子どもの世界らしい幼稚園にしたいという主張が、根本になってはたらいいたに相違ない。が、それよりも、もっと純な気持ち<sup>注3</sup>は、幼児達を喜ばせてやりたいということであった」倉橋の人形芝居普及にかける思いの「根本」に迫る奥行きが心もちにはある。それに比べ表層的ではあるが、その場の人を突き動かす「純な」気持ちとの、二層性が見えないだろうか。

(お茶の水女子大学准教授)

#### 注

- 1 『就学前の教育』一九三一年より。『倉橋惣三選集三』倉橋惣三著 フレーベル館 一九六五年 p. 496～497に所収
- 2 本田和子『倉橋惣三』をめぐる一つの見解より。倉橋惣三文庫10『倉橋惣三と現代保育』津守真・森上史朗編 フレーベル館 二〇〇八年 p. 173～177に所収
- 3 菊地ふじの・徳久孝子著『幼児のための人形芝居の脚本』保育叢書1 フレーベル館 一九三二年 倉橋による序文より